

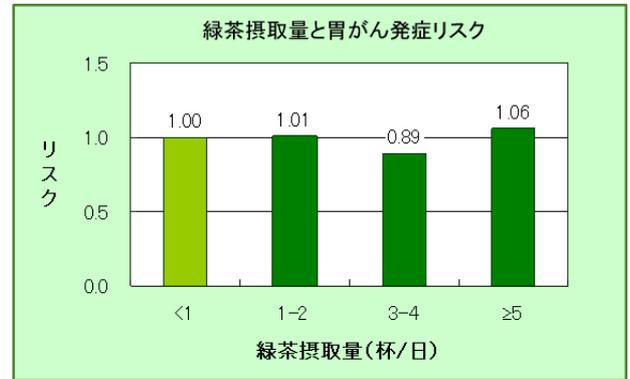
## 緑茶と胃がん発症リスクとの関連

No association between green tea and the risk of gastric cancer: pooled analysis of two prospective studies in Japan.

2003年 Cancer Epidemiology, Biomarkers and Prevention 発表

### 緑茶をよく飲む人でも、胃がん発症リスクは低くならない

動物実験による研究や症例対照研究では、緑茶は胃がんに対して予防効果があるといわれていますが、5つの前向きコホート研究では緑茶の胃がん予防効果は否定されています。また、これらの前向きコホート研究では、部位別や組織型別には解析を行っていないため、宮城県コホートと大崎コホートのデータを合わせて胃がん全体・胃がん部位別・胃がん組織型別に解析を行いました。緑茶の摂取量によって被験者を4つのグループに分け、緑茶をほとんど飲まない群（1日1杯未満）を基準として、胃がん発症リスクを比較しました。すると、緑茶の摂取回数が高くなっても胃がん全体・胃がん部位別・胃がん組織型別全てにおいてがんリスクは減少しませんでした。



### 研究のデータについて

ベースライン調査：解析には、宮城県内の2つのコホート研究のデータが使われました。1つめは、宮城県コホートで、1990年6月から8月に宮城県内14町村在住の40～64歳の男女約5万2千人に対して自己記入式アンケートを配布したもので、うち4万7605人から有効回答を得ました。回答率は92%でした。

2つめは、三府県コホートで、1984年1月に宮城県内3町村在住の40歳以上の男女約3万3千人を対象に、生活習慣や健康状態などに関する自己記入式アンケートを配布したもので、3万1345人から有効回答を得ました。回答率は94%でした。

追跡調査：ベースライン調査に答えていただいた方のうち、宮城県コホートの集団は1990年8月1日から1997年3月31日まで、三府県コホートの集団は、1984年1月1日から1992年12月31日まで追跡調査を実施しました。その上で、がんの既往歴のある方、今回の研究に関連する質問への回答に不備のあった方を分析の対象から外しました。宮城県コホートでは3万9604人が対象となり、うち追跡期間中に314人が胃がんと診断されました。三府県コホートでは2万6311人が対象になり、うち追跡期間中に419人が胃がんと診断されました。

### 緑茶の摂取について

食事についての40項目のアンケートの中で、平均してどれくらいの回数飲んでいるかを尋ねました。回答の選択肢は2つのコホート研究で共通しており「飲まない」「時々飲む」「1日に1～2杯」「1日に3～4杯」「1日に5杯以上」の5つでした。

緑茶の摂取量以外に胃がん発症リスクに関わる可能性のある他の条件については、その影響をできるだけ取り除きました。具体的には、性別、年齢、健康保険の種類、喫煙、飲酒、米類摂取、紅茶摂取、コーヒー摂取、漬物摂取、味噌汁摂取、肉類摂取、野菜類摂取、果物類摂取、胃がんの家族歴、胃潰瘍の既往歴について、グループ間の偏りを統計学的方法で調整しました。

### 研究の特徴と限界について

この研究の特徴は、一般市民を対象とし長期間にわたって追跡していること、十分な数の胃がん症例を確認しているため胃がんの部位・組織型別の解析結果が提示できていることです。胃がん発症リスクを部位・組織別に検討している研究は、中国の症例対照研究が1件あるのみで前向きコホート研究では初めての研究になります。

限界としては、緑茶を高頻度に摂取する群の同定ができていないことがあげられます。緑茶の摂取頻度は最高で1日に5杯以上となっており、2つの症例対照研究では1日に7杯以上と高頻度で摂取する群で胃がん発症リスク低下が示されています。しかしこの研究以外の大規模なコホート研究において、緑茶摂取は胃がん発症リスク

---

低下に関連しないことが示されているので、緑茶を高頻度に摂取する群でのみリスク低下が見られるという仮説は支持されないでしょう。また、胃がんの危険因子として確立されているヘリコバクター・ピロリ（ピロリ菌）の感染に関する情報が得られていないことも限界としてあげられます。緑茶摂取と胃がんに関する全ての前向きコホート研究でピロリ菌の感染情報を考慮していません。緑茶には抗菌効果があるといわれており、緑茶摂取が高い被験者の間でもピロリ菌感染が高いことは考えられず、グループ間の感染の有無を統計的な方法で調整しても、この研究の結果に影響はなかったと考えられます。

---